

# 中学生の感情特性が認知過程に及ぼす影響

## *The Influence of Affective Traits on Cognitive Process in Junior High School Students*

児童学研究科 児童学専攻 1003-070612 井上 英美

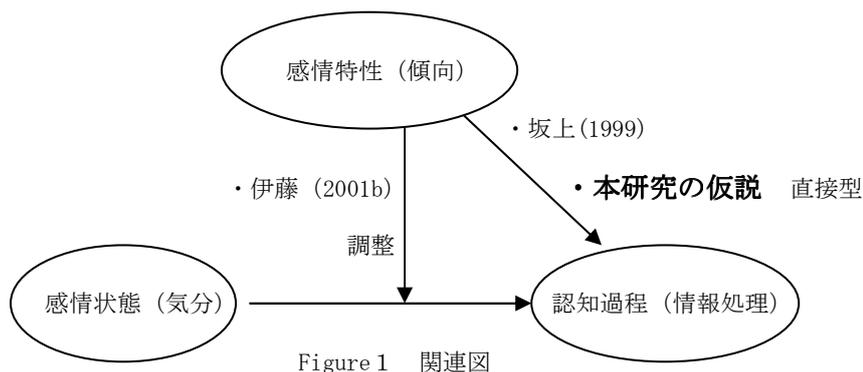
### 問題と目的

不登校やいじめ、さらに少年犯罪の増加・低年齢化など、その一途に中学生の問題行動の指摘がある。中学生の問題に関しては、学校ストレスに注目した検討（岡安・嶋田・坂野, 1992b; 岡田, 2002）やさらにソーシャルサポート（廣岡・森田, 2002; 飯田・宮村, 2002）等による中学生の心理的ストレスへの対処、また、中学生の対人関係を感情体験との関連から調査した浅野・小玉（2007）らは、ソーシャルスキルの発達が高いほど、ポジティブな感情を多く経験し、他者への感情の気配りが高いことを示唆している。さらに杉浦・田中・山田（2007）らにおいては、中学生の反応行動（反応的攻撃性）は認知的成熟度や自尊感情の低さ、孤独感の高まりが攻撃性と関連していることなどを明らかにしている。

思春期は、小児から成人へと移行する第二次性徴の出現（大山, 2004）によって身体的にも生理的にも急激に変化することへの葛藤や不安が激しい情動反応（吉田, 2000）を生起させ問題とされる行動に駆り立てられていることは否定できない。しかし、これまで青年期における感情に関して、その否定的側面をアプローチする実験的な検討は行なわれてはいるが、青年期前期の日常的な「感情」そのものに着目した検討は少ない。唯一、大学生の感情に関連した人格特性と認知との関連に着目した坂上（1999）の研究において、日常どんな感情を持ちやすいかの傾向を「感情特性」、今感じている感情を「感情状態」と区別し、曖昧刺激図版による人物の感情を解釈させた。結果、大学生の感情特性は、気分の型をもつ感情状態とは独立した形で関連することを明らかにした。一方、伊藤（2001b）は、感情特性と感情の解釈との関連は直接的な影響というよりも、感情状態を調整するアプローチとしての感情特性との関連を指摘した。中学生の行動を捉えるとき、外界の状況や刺激への反応行動が即ストレッサーによって問題行動の引きがねになるというよりも、むしろ

ろ外界の刺激を認知したとき、その行動を生起させる直接的な感情特性、つまり日常よく経験する感情傾向が影響を及ぼす可能性が予測される。

以上を踏まえ、本研究では、「人は通常自分が経験しやすい感情を、外界との刺激の中にも読み取りやすい傾向を有している」とした仮説を立て、中学生の認知過程に感情特性が直接的に影響を与えている可能性を感情状態、感情解釈との関連から検討することを目的とした。下記に本研究の仮説図を示した。



## 研究 1

### 刺激図版の登場人物の感情解釈尺度と被験者の実験時の感情状態尺度の作成

方法：

#### 予備調査 (1)

【調査目的】 刺激図版の選定をする。

【調査時期】 2009 年 6 月初旬。

【調査対象】 公立中学校に在籍する 2 年生 / 有効回答 66 名 (男子: 34 名、女子: 32 名)。

【調査内容】 刺激図版の冊子 (2 種類) をもとに回答する記述式。自作の図版 7 枚と坂上 (1999) が用いた図版説明をもとに、あらたに作成した 5 枚の合計 12 枚の図版を呈示し、各図版に描かれている絵の場面状況および登場人物の感情を読み取る感情解釈について自由記述を求めた。図版には、表情のない (目、鼻、口などの部位が描かれていない)、一人あるいは複数の人物が白黒の線画で描かれている。各図版には見方によっては葛藤的な感情が読み取れるような刺激を入れてある。登場人物が複数の場合は、自主選択で、一人を選別してその人物の感情を読み取るように呈示した。

【調査手続き】 実施はクラス担任の教示で、一斉に実施し、担任がその場で回収した。

#### 予備調査 (2)

【目的】 実験時の感情状態と感情解釈で使用する感情を表わす形容詞を収集する。

【調査時期】 2009年6月初旬。

【調査対象】 公立中学校に在籍する2年生（予備調査1とは異なる被験者）／

有効回答67名（男子：33名、女子：34名）。

【調査内容】 質問紙法：4種類の感情（喜び・興味・怒り・悲しみ）を表わす形容詞を各感情について、3語以上の自由記述を求めた。

【調査手続き】 実施はクラス担任の教示で、一斉に実施し、担任がその場で回収した。

**結果と考察：** 予備調査（1）では、12図版中、9図版において、場面状況の解釈がおおよそ4種類の喜び・興味・怒り・悲しみの場面状況に分かれた。登場人物の感情状態の解釈では、12図版中9図版が喜び・興味・怒り・悲しみのうち3種類以上の感情を読み取っていた。結果、9図版については、場面状況の解釈や人物の感情状態の解釈に多様性を帯びた図版であると判断し、中学生用の刺激図版として本調査で用いることにした。予備調査（2）では、各感情につき得点の多い形容詞群から、喜び（うれしい、たのしい）、興味（おもしろそう、なんだろう）、の2語ずつ。怒り（ムカつく、うざい、イライラする）、悲しみ（かなしい、ショックだ、落ち込んだ）、の3語ずつを選出し、4感情10語から成る評定尺度を作成した。

## 本調査

【調査目的】 予備調査で選定した図版および感情を表わす形容詞を用いて作成した評定尺度の信頼性と妥当性の検討をする。

【調査時期】 2009年7月中旬。

【調査対象】 公立中学校に在籍する2年生／有効回答91名（男子：40名、女子51名）。

【調査内容】 質問紙法：予備調査で作成した、(1)被験者の実験時の感情状態尺度10項目、(2)図版の登場人物の感情解釈尺度10項目、それぞれを「近い」から「近くない」の4件法。(3)感情特性の測定は、Izard et al. (1993)の個別情動尺度4版（坂上翻訳, 1999）の12感情のうち4感情（喜び・興味・怒り・悲しみ）を選び使用した。個々の感情につき3項目の合計12項目で、「よくある」から「まったくない」の4件法。

【調査手続き】 実施はクラス担任の教示で、一斉に実施し、担任がその場で回収した。

**結果と考察：**（1）被験者の実験時の感情状態尺度の評定では、各感情状態において、 $\alpha$ 係数が.62以上あり、内的整合性が認められた。怒りと悲しみに高い相関があった（ $r = .56, p < .001$ ）。（2）図版の登場人物の感情解釈尺度の評定では、各感情解釈において、

$\alpha$ 係数が.74以上で、内的整合性の高い尺度であることが確認された。(3)感情特性の評定では、各感情特性において、 $\alpha$ 係数が.60以上で、内的整合性があることが確認された。妥当性については、各尺度それぞれが評定すべき概念が過不足なく反映されたことで内容的妥当性がある尺度であると判断した。

## 研究2

研究1で作成した実験時の感情状態尺度と感情解釈尺度を用いて、

### 感情特性が認知過程に及ぼす影響の検討

方法：

#### 予備調査(1)

【調査目的】感情特性の時間的安定性の検討をする。

【調査時期】1回目2009年7月中旬 / 2回目2009年10月中旬。

【調査対象】公立中学校に在籍する2年生・3年生/450名。有効回答410名。

(男性190名、女性220名、レンジ13-15歳、平均年齢14.34歳、標準偏差0.64)

【調査内容】質問紙法：Izard et al. (1993)の個別情動尺度4版(坂上, 1999 翻訳)を用いた。4感情(喜び・興味・怒り・悲しみ)の各感情につき3項目の合計12項目(4件法)。

【調査手続き】調査の実施はクラス担任の教示で、一斉に実施し、その場で回収した。担任用の教示文を作成した。教示には被験者の出席番号を必ず明記するよう依頼した。

**結果と考察：**喜び( $r = .46, p < .001$ )、興味( $r = .60, p < .001$ )、怒り( $r = .53, p < .001$ )、悲しみ( $r = .52, p < .001$ )のそれぞれに中程度の有意の正の相関が見られた。

#### 本調査

【調査目的】中学生の感情特性が認知過程に影響を及ぼす可能性を感情解釈、実験時の感情状態との関連から検討する。

【調査時期】2009年10月中旬。

【調査対象】公立中学校に在籍する2年生・3年生/450名。有効回答410名。

(男性190名、女性220名、レンジ13-15歳、平均年齢14.34歳、標準偏差0.64)

【調査内容】質問紙法：(1)被験者の実験時の感情状態尺度の10項目。(2)図版の登場人物の感情解釈尺度の10項目、(3)感情特性尺度の12項目。(1)(2)は「近い」から「遠くない」の4件法。(3)は「よくある」から「まったくない」の4件法。

【調査手続き】調査の実施はクラス担任による教示で、一斉に実施し、その場で回収した。全体の実施順序としては、(1)を最初に実施し、(2)、(3)の順とした。質問用紙は、感情解

積用となる図版の呈示順の影響を考慮して5種類用意した。

**結果と考察：** (1)被験者の実験時の感情状態の傾向は、性差がなく肯定的であった。(2)図版の登場人物の感情解釈の傾向は、性差が認められ男子は女子に比して、怒りの感情解釈に有意な関連が見られた。(3)感情特性の傾向では、男女差があり、特に女子は男子に比して、喜び、怒り、悲しみの感情特性が有意に高かった。結果、男子は様々な外界の刺激の中で、怒りがあるか否かといった認知処理を行う感情状態があり、女子は、日常的に肯定的感情と否定的感情の相反する感情傾向を経験している頻度が高い。感情特性、実験時の感情状態と感情解釈との関連では、単純相関、偏相関および重回帰分析、パス解析結果から、本研究の仮説は支持されなかった。すなわち、男女共に普段の生活で日常よく経験しやすい感情特性の表出よりも、そのときの気分によって外界の刺激を認知しやすい傾向が示唆された。そこで、感情特性と実験時の感情状態との関連を確認するため重回帰分析およびパス解析の結果、全体的傾向、男女別傾向ともに相互の関連が明らかとなった。特に4感情の中でも、喜びの肯定的感情、怒りの否定的感情は他の感情に比して強い関連が示唆された。総じて、中学生の感情と認知の関連は、刺激を認知する過程では気分による感情状態が先行研究に準じた気分の一致効果をもつが、外界の刺激に反応する必要がない状況では、日常的に経験している特定の感情と関連しあうことが示唆された。

### まとめと課題

今後の課題として、個々に成立した感情の抑制力の問題がある。刺激を認知したとき、感情特性の高い人は、低い人に比してその特性を抑制しようとする。つまり、ポジティブな気分の場合は、なるべくその感情を維持しようとして否定的な領域におかれても抑制する傾向がある。また、その逆傾向も同様で、この点は気分一致効果に見られる(伊藤, 2005)特徴的な側面である。本調査では女子にその傾向が高く、この抑制が感情特性の認知過程に影響を及ぼすことも考慮する必要があるだろう。二つには、中学生の情動の不安定さである。外界の刺激に適した反応行動は、その自己感情の意識化が必要不可欠である。

本研究は、中学生を対象にしたもので、実質的には不安定な情動の発達があり、その表出においては外界の刺激に左右される感情状態があることが見出された。この結果において、中学生の感情と認知との関連が感情特性を主流とした、感情状態等の個人的な傾向を知るきっかけとなり、感情からもたらされる行動の抑制や改善、また自己感情への意識化を図る動機づけとなることが肝要である。